



私が小学二年生だった頃、「銀牙—流れ星銀」—という漫画に、五年生だつた兄とハマっていました。狂暴な人食い熊と戦う犬たちの物語。私と兄は犬を飼いたくてたまりませんでした。母親に言つてみるものの、「社宅だから」と一蹴。それ以上食い下がりようのない理由でした。

それからしばらくして、違う町に家を建てることにしたと両親から告げられます。これから建つ新しい家は楽しみだったけれど、また転校。私と兄にとつては三つ目の小学校に行くことになりました。

引っ越しすることをいつ友達に言おうか、ぼんやり歩いている下校中、ケージに入つた数匹の仔犬達を見つけます。学校と社宅との間に動物病院があつて、その軒下。貰い手を探しているという貼り紙。急にドキドキし始めました。「引っ越すのだから飼えるのかも!？」胸の高まりに耐えきれなくなつて、いつたん帰宅。兄の

その日は母に連れられて家に帰り、家族会議。最後まで渋つていた父を母が説得してくれ、後日仔犬を迎えることに。「流れ星銀」の父犬「リキ」の名前を付けました。

### 意外だつた母の言葉

時は流れて今度はうちの末っ子が

小学二年生の昨年。犬を飼いたいと訴え始めました。渡された嘆願書は何枚もあり、学校で書く作文でも

そのことばかり。残念なことにどれもこれもあまりに字が汚く、誤字だらけ。「ぬ」が書けるよつになつたらね、などと先延ばしにしていました。犬はかわいい、私だって飼いたい。これは私の覚悟次第だなとは思つていました。これ以上子供へのやうなもののが増えてやつていけるのか。子供たちは中学、高校、それから先、部活動に塾にバイトにと、犬の世話をする時間が物理的になくなつていくのが、自分の経験から分かつています。

**文・写真  
小宮華寿子**  
二男一女の母で、  
編集者。「プラ」と  
ジルの手しごと  
(メイツ出版)著者。世界の雑貨と  
ワークショップの店「マルカジーニョ」  
(<https://mercadinho.net>)代表。

**イラスト・  
デザイン  
寺沼麻美**  
切り絵作家、時々  
デザイナー。「ゆ  
らゆらゆれる北欧風手作りモビ  
ール」(ネコ・パブリッシング)を監修。

ぶかぶか漂う  
第19回

## 犬を迎える母の気持ち



私が小学二年生だった頃、「銀牙—流れ星銀」—という漫画に、五年生だつた兄とハマっていました。狂暴な人食い熊と戦う犬たちの物語。私と兄は犬を飼いたくてたまりませんでした。母親に言つてみるものの、「社宅だから」と一蹴。それ以上食い下がりようのない理由でした。

それからしばらくして、違う町に家を建てることにしたと両親から告げられます。これから建つ新しい家は楽しみだったけれど、また転校。私と兄にとつては三つ目の小学校に行くことになりました。

引っ越しすることをいつ友達に言おうか、ぼんやり歩いている下校中、ケージに入つた数匹の仔犬達を見つけます。学校と社宅との間に動物病院があつて、その軒下。貰い手を探しているという貼り紙。急にドキドキし始めました。「引っ越すのだから飼えるのかも!？」胸の高まりに耐えきれなくなつて、いつたん帰宅。兄の

案の定、兄も仔犬たちを見つけていました。母に話してみるのか、いや、この千載一遇のチャンスを逃すわけにはいかない、引っ越しまでこうぞり二人で飼おう！

はじめて中まで入つた動物病院。緊張しながら仔犬をもらいに来たと獣医さんに話します。「社宅じゃなくなつて、庭がある新しい家に引っ越しで飼えるんです！」と。「ご両親はいって?」家の電話番号を聞かれました。兄も私も硬直。作戦失敗？ 叱られる？

しかし、駆け付けた母は「ご迷惑かけてすみません」と言いながらも笑いがこらえきれない様子。「お宅のお子さんが犬をもらひに来ていて」という獣医さんからの突然の電話にあまりにびっくりして笑いが出てしまつたようです。獣医さんも笑つていて、叱られるわけではなさそうだと少しほほとしました。

だから私次第。

決め手は私の母の「飼つてあげなよ」という言葉でした。私と兄が飼いたがつた犬。世話の割合が段々と母任せになつて行き、長生きしたリキの最後を看取つてくれた母。母も覚悟を決めて犬を飼う決意をしてくれたのかもしれません。

よくよく考え、話し合い、我が家にも仔犬を迎えました。息子たちは大喜びでよく面倒も見ていています。私にとつては想像以上に我が子同然。十数年後、人間の子供たちが全員無事に巣立つていてくれるのが何よりだから、責任を持つて私がこの子の老後と向き合おうと思ひます。